

月刊 天真

発行日 2025(令和7)年7月1日
 発行者 浄土真宗本願寺派天真寺
 住職 西原恵照
 第580号

シリーズ
 仏教語豆辞典
 第22回

我慢 (がまん)



日常的に使っている言葉には、仏教の言葉から生まれた「仏教語」がたくさんあります。由来をたどってみると、その言葉の理解が深まったり、本来の意味との変化に驚いたり、とても興味深いです。なじみのある言葉を、仏教とのつながりからみてみましょう。

我慢 強情な態度 ⇔ 耐え忍ぶ姿

阪神・淡路大震災のとき、ワシントン・ポスト紙は「多くの被災者のキーワードはGAMANだ。GAMANとは困難に耐える意味の日本語で、ここでは大切な美德なのだ。市民たちはお互いに、我慢、我慢と助け合って苦難を乗り越えようとしている」と伝えました。我慢は、辛抱すること、堪え忍ぶことを指し、よい意味に用いられています。

この我慢は、仏教語なのですが、あまりよい意味ではないのです。自分の中心に「我(が)」があるとの考えから、我をたのんで自らを高くし、他をあなどることと説明しています。仏教では、そのようなおごりたかぶる心を七つ挙げ、「七慢(しちまん)」と称していますが、我慢もその一つです。

それが、我が強い、負けん気が強い、がんばる、辛抱するなどに変化したようです。それにしてもよくない意味の語が、よい意味の語に変化していったのはおもしろいですね。

(辻本敬順著『くらしの仏教語豆事典』(本願寺出版社)より転載)



お盆のご案内

お盆が近づいてまいりました。亡くなって初めてのお盆を迎えるご家庭では、「新盆法要(しんぼんほうよう)」をおつとめします。お寺で営む合同の新盆法要は予約制となりますので、該当される方には事前に案内をお出しします。新盆もお盆も各家ごとの法要を希望の場合は、お早めにご連絡ください。

【合同法要】8月14日(木)・15日(金) 午前10時・11時半「新盆法要」 午後1時半「お盆法要」 両日とも、新盆法要は予約制、午後の法要はご自由にお参りいただけますのでぜひご予約ください。詳細は来月号の寺報でお知らせいたします。ご不明なことはお気軽にお寺までお尋ねください。

今月の予定

2025年 7月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5 10:00納骨堂合同参拝 13:30グランドゴルフ
6 7:00日曜礼拝	7	8	9	10	11	12
13 7:00日曜礼拝	14	15	16	17	18 グランドゴルフに 参加しませんか 貸道具あります 初心者も大歓迎 見学からどうぞ	19 13:30グランドゴルフ
20 7:00日曜礼拝 13:30法話会	21 海の日 【講師】柏倉学法師(千葉県)	22	23	24		26
27 7:00日曜礼拝	28	29	30	31	<来月> 8月14・15日 お盆法要 新盆法要 ※7月の駄菓子屋カフェくるくるはお休みです	

● 印がついている行事はオンライン配信します。天真寺HP、またはこちらから
 →<http://www.koumyou.net/tenshin>

お寺の行事は
 このQRコードから
 オンライン参加
 できます



天ちゃんの一言

- 副住職が地域の消防団の分団長になりました
 お寺がある地域の松戸市22分団の消防団に入団して約20年、今年の4月から分団長に任命されました。夜間の見回りなど今までの実務に加え、連絡業務や会議も増えて大変ですが頑張ります！
- 現在「大町やすらぎパーク」に数区空きがあります。ご希望の方はお寺までご相談ください
- 「天真寺門信徒会」 仏さまのお話を聞き、お念仏申す豊かな人生をともに歩みましょう
 毎月 寺報と仏教冊子を送付し、法要や法話会のご案内をしています。お寺の行事はすべて参加自由です。仏さまのみ教えを聞いて、確かな人生の拠りどころを見つけませんか。
 年会費:3千円 会費振込先:ゆうちょ銀行「天真寺門信徒会」00130-6-567186
- 天真寺ホームページでお寺の日々を綴っています
 「住職の独り言」 blog.goo.ne.jp/ranman_kn (住職のブログ)
 「天真寺通信」 tenshin.or.jp/ (副住職のブログ)



入会随時募集
 門信徒会
 に入りませんか

お寺の掲示板の言葉

他者の過ちや、
 為したと 為すべきと 為さなかったことと
 見るのではなく、
 自己の為したと、
 為すべきことと 為さなかったことを観よ
 (ダンマパダ)

浄土真宗
 本願寺派

天真寺

〒270-2251
 千葉県松戸市金ケ作106

TEL 047-389-0808

FAX 047-389-0809

www.tenshin.or.jp





真夏の法話会

【日時】 7月20日(日) 午後1時半～3時半

かしわぐら がくほう

【講師】 柏倉 学 法師 (本願寺派布教使・千葉県我孫子市 真宗寺)

天真寺の法座には何度もご登壇いただいています。小学生の一女の父であり、大変子煩悩。全国各地、また築地本願寺の常例法座やイベントでも大活躍されている今、人気の先生です。

【場所】 天真寺本堂 (椅子席)



仏さまのお話にはあなたの人生をより深く、豊かにしてくれるヒントがあるかもしれません。初めての方も、どうぞお気軽にお参りください。先生にご参加いただく座談会や終了後には茶話会も開催しますので、ぜひこちらにもご参加ください。疑問・質問もどうぞ。



住職の独り言

■沙羅双樹(さらそうじゅ)

沙羅双樹といえば、有名な『平家物語』の冒頭に出てくることで知られる花です。

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

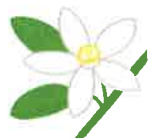
沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理(ことわり)をあらわす

まさに盛者必衰の言葉の通り、沙羅双樹は朝に咲き、夕方(夜)には散りゆく、儚さを感じさせる花です。この時期、しばらくは朝の時間は散った花の清掃です。掃き掃除をしながら、『白骨の御文章』の一節がふと心に浮かびました。

朝に紅顔あって 夕べに白骨となれる身なり

花はただ終わっていくだけではありません。次の実を育てるために散っていくのです。蓮如上人は御文章のなかで、人間の一生において残るのがただ白骨だけ、という人生を歩んではむなしいですよ。自分の「後生の一大事」死んだらどうなるのかという問いをいのちをかけて求め、阿弥陀如来に深く帰依しお念仏申すべきであると教えてくださっています。短い花の生涯に自らの人生が重なる朝のひとつきでした。



■最後の車

私も後期高齢者です。運動神経も鈍くなり、判断力の低下も実感する日々です。先日車を買替えるにあたり、楽に運転できるように安全性能が高く、運転支援機能が搭載された車を選びました。これが最後の車になるだろうと話したところ、「みんな最後の車は霊柩車に乗るんだ」と聞かされ、「なるほど～」と気づかされました。確かにその通りです。そのことを忘れていました…。

■勿体ない

冷蔵庫の奥にとうに消費期限を過ぎた食品が眠っています。早く食べればよかったのに勿体ないですね。高価な洋服がタンスに吊り下げられています。高価だから外出着にしようと思っておいて、結局吊り下げたままで着ないのは勿体ないですね。ビュッフェスタイルの食事であれもこれも食べたいとたくさん取っても、残したら勿体ないですね。勿体ないは「勿体」という仏教語が語源といわれます。勿体とは、「もののあるべきすがた、本来持つ価値、本質的なもの」という意味だそうです。まわりを見回すと、勿体ないものばかりであることに気づかされます。



「熟年世代に仏教を説く」

僧侶・作家 向谷 匡史師

「仏教」でなく「仏教テイスト」

僧侶が短パン、Tシャツ姿で、「弥陀の本願をご存知ですか？」いきなり声をかければ、女性なら110番。男性ならブン殴られるでしょう。警察官は制服を着用するから警察官。白衣を着るから看護師と認知される。こう考えると、法衣に袈裟をつけているから僧侶であって、短パン、Tシャツ姿であれば、ただのオッサンか爺さんにすぎない。言い換えれば、私のように“世俗の垢”にまみれ、50代半ばに得度した人間であっても、法衣に袈裟をつければ立派に(?)僧侶として通用するというわけです。そんな私がこの頃つくづく感じるのは、60代、70代の一般の方々が欲しているのは「仏教テイスト」の話であるということです。「仏法」ではありません。「仏法テイスト」です。しかるに僧侶は「仏法」のみを説こうとしている。このギャップが、「仏法離れ」の一因になっているのではないかと思います。



熟年が僧侶に求めるもの

夫に先立たれた70代のご婦人のお宅に法事で伺った時のことです。「お仏壇に毎朝お水をあげているのですが構いませんか？」不安そうに尋ねました。さて、どう答えるべきか。「ダメダメ、浄土真宗では水はあげませんよ。お浄土には八功德水(はっくどくすい)という素晴らしい水が満ち満ちているんですから」ピシヤリとたしなめたのでは反感を買います。“世俗の垢”にまみれた私ですから、教義を振り回すような愚はおかしません。「八功德水ということから水は供えません」と前置きしたうえで、「しかし、ご主人が喉が渇かないようにとお供えする気持ちは尊いものです。お供えしたければどうぞご遠慮なく」「よくわかりました。もう水はあげないことにします」晴れやかな顔でおっしゃった。この方の関心事は仏法解釈ではなく、間違っていたら“バチ当たり”になるかもしれないという不安なのです。ここを勘違いし、仏法を説くチャンスとばかり、「八功德水は8つの功德を備えている水でありまして、俱舎論では…」熱心に説いても右から左。「八功德水」なる仏教用語をまぶして自分の行為を納得させてくれるだけで十分なのです。



瀬戸内寂聴さんの「法話」

故・瀬戸内寂聴さんの「あおぞら説法」は絶大なる人気がありました。岩手県の最北にあるお寺にもかかわらず2千人、3千人が聴聞に集まる。私は内容が知りたくて説法集を買ってみました。

面白い。実に面白い。体験談を縦に横に展開し、腹落ちもします。ところが、感心しながらも、ふと疑問がわいてきました。(これって、説法なのか?)内容は人生論なのです。人生論に時折、「お釈迦様も「明日のことは思い煩うな」とおっしゃっておられます。そして「過去のこともよくよするな」とも。これは仏教の極意ですよ」と「仏教テイスト」をまぶし説法の体裁を整えている。非難しているではありません。真逆です。ここに見習うべきノウハウがあると、私は思わず膝を打ったのです。



法話へ導く「前段」の努力

それからというもの、法事での話は「仏教テイスト」をまぶした人生論を心がけてみました。どうだったか。60代、70代の、ことに夫に先立たれたご婦人は、必ずと言っていいほど耳を傾け、そして自分を語ります。夫に仕え、子育てに専念するのが主婦の本分とされた「昭和」を引きずる高齢女性は、夫の死を契機に半生を振り返り、「自分の人生は何だったのか」—そんな懐疑に襲われるようです。そこで「法衣に袈裟」の私が、「人間は食欲というものがありますから、どんなに幸せであってもそう気づかないものです。あなたは、あなたの人生がいかに素晴らしいものであったかに気がつかないでいる」「食欲」という「仏教テイスト」をまぶし、人生論を語りかけることによって、この方々は耳を傾けてくださるのです。言葉を変えれば、「昭和」を生きた女性は自己肯定感に乏しいということなのでしょう。「あなたの人生はこれでよかった」—僧侶にそう言ってし欲しいのだろうと、これは私が感じることです。そして、お互い良好な関係が築けたところで、少しずつ法話に入っていくというわけです。私が痛切に感じるのは、仏法を説くための努力はしても、そこに導くための工夫が足りないのではないのかということです。寂聴さんの「あおぞら説法」が大盛況であったように、「仏教テイスト」の語りかけが仏教を広める上で大きな意味を持つと思うのですが、「そんなものは法話ではない！」エライ僧侶に一喝されてしまいます。本当にそれでいいのか。“世俗の垢”にまみれた身体を法衣に包む私は考え込むのです。(仏教情報センター発行「仏教ライフ」より転載)

■向谷匡史(むかいだに・ただし)師 プロフィール 週刊誌記者を経て作家。56歳で浄土真宗本願寺派の僧侶として得度。天真寺では法話会の講師や法務のお手伝いをいただいているご縁の深い先生です。